救う

6 フリースクール

不登校から「卒業」

照明が淡くさす舞台で、瞳さん(17)＝吉川市、仮名＝は、キーボードに集中した。ギター、ベース、ドラム、みな懸命だ。

キャンディーズやビートルズのナンバーを立て続けに5曲弾いた。1曲終わると、約30人の「観客」から拍手がわいた。

「失敗したところもあったけど、笑って許してもらえた」

越谷市の東武伊勢崎線せんげん台駅前の雑居ビルに入る、フリースクール「りんごの木」で先月あったクリスマス会。

「人と一緒に何かを達成した」。バンドに加わってみて、瞳さんは、そんな充実感を覚えた。

小学1年。クラスの男の子に足をつねられるなどいじめにあった。担任や友達が味方してくれた。逆に非難された男の子は、しばらくして転校した。

それから、学校に行くふりをして公園にいた。自分が言わなければ男の子は非難されなかった。嫌な気持ちを引きずった。

「どうして行かないの」

「とにかく嫌だ」

「これからどう生活するの」

話し合いを重ね、両親が折れた。絵を描き、文通・洋裁を自宅でする毎日。10年間めったに外に出ることはなかった。

昨年、母の知人の漫画家が講師を勤める、「りんご」の公開漫画講座に参加した。そろそろ、外に出てみよう、という思いもあった。

数カ月後、「入ってみない」。スタッフに誘われた。

「まんが好きな子と話が盛り上がったりする。一人ではできない経験でした。後ろ向きな性格が少し直ったかな」

県教育局によると、「りんご」のように、様々な理由で学校に行かなくなった子どもが通うフリースクールは、県内で約50あり、小中高併せて9736人(05年度、私立除く)の不登校児・生徒の受け皿としても、機能しているという。

「りんご」は90年、不登校児の親たちが子どもの「居場所」を作ったことからスタート。01年にNPO法人格を取得し、現在9歳から21歳までの32人が月会費を納めて集まる。

勉強部屋はあるが、授業はない。音楽、映画制作、スポーツ……。子どもたちから「やりたい」と声が上がれば、スタッフが応じる。

「何かを『強制』するのは、ここでは御法度です」と、法人理事長の増田良枝さん(57)＝越谷市＝は説明する。

増田さんも17年前、長女が中学校の部活動がもとで不登校になった。

増田さんは、小さいころから、「学校へ行かなければ、社会の一員になれない」と親から教え込まれた。まさか自分の子が不登校になるとは。

「甘やかしたからでしょ」「ほったらかしにしたからではないの」。同級生の母親らの声に振り回された。悩み、苦しみ、不整脈になった。

90年、「りんご」の前身の「フリースペース」に足を運んだ。

「大変だったね」

不登校児を持つ親が話しかけてくれた、この一言に救われた、と増田さんは振り返る。

以来スタッフとして活動にかかわった。法人の立ち上げに奔走し、05年には法人の理事長に就いた。

これまで「りんご」から延べ50人以上が「卒業」していった。高校・大学進学、パティシエ、整備士と進路はさまざまだ。

増田さんはいう。

「学校以外の多様な学びの場は必要だと思う。不登校は自分だけじゃない、という感覚は、時に子どもを勇気づけるんです」

(木村尚貴)



クリスマス会で、スタッフやボランティアの歌やダンスを楽しむ子どもたち＝越谷市のフリースクール「りんごの木」で、金井三喜雄撮影